特241
346

×複写

東京帝國大學名譽教授
帝國森林會々長
林學博士ドクトル
本多靜六述

幸福とは何ぞや

「附」子孫の幸福と努力主義

1577

財團法人
帝國森林會

始

特241
346

本書は昭和三年二月十日開催の本會第四回講演會に於ける本多博士講演の要領にして思想界の混沌たる折柄修養上裨益尠なからざるものあるを認め之を上梓公表することゝせり。

昭和三年九月

東京市赤坂區溜池町一番地
財團法人 帝國森林會

幸福とは何ぞや

本多靜六講演

幸福とは何ぞやと題し暫く諸君の清聽を煩はします。

先頃私は潛越にも「直に幸福となる處世の秘訣」てふ小册子を公にし、主として私の體驗から生れた所謂「職業の道樂化を目指して奮闘する努力主義」を發表しました處、圖らずも意外の好評を博し、僅か三ヶ月間に私の手許から出ましただけが二萬五千餘册、外に自分で印刷して配ばるからと云ふ通知を受けたものが十數萬册に上りましたが尙每日二三十人宛貰ひに來らるゝ狀態でありまして、而して又之を讀まれた方々からは種々感謝の手紙が參り、中には此の本を讀んで初めて世渡の道が解つたとか、无明の夢から醒めたとか、禁酒禁煙をしたとか、家内中平和になつたとか、斷然社會主義を止めましたとか、或は一村擧つて貯金組合を組織したとか、或は又公民學校の教科書にしたとか、それはそれは涙の溢れるやうなものが多く、特に最近朝鮮人臺灣人よりの謝狀にも眞情の溢れたものが少な

からずあります、私は此等の手紙に接する毎に眞に背に汗を生じ、穴にでも這入りたい心地が致します、そこで私は沁々考へて見ました、此未熟なる小冊子が新く汎く世に歡迎さるゝと云ふ事は一は先輩知友が「是は良い本だ」と裏書し吹聽して下すつたお蔭と、一は現代の人心が頗ぶる不安の狀態にある所から之を要求するものであると考へ付きました、然れば私としては猶ほこの上一層深く研究し愈〻完全なものとなす事はこれ實に私が先輩知友の厚意に酬ゆる所以であり、又時世の要求に應ずる私の義務であると思ひ付きました、そこで今年元日から一百日の間毎日三時間づゝ處世の秘訣を專心に檢討し研究する行を始めました、卽ち先づ初めに直に幸福となる處世の秘訣とあるが其の幸福とは抑〻何であるかの檢討に着手し、次で欲望の本體と私の所謂努力主義が今日の遺傳學から見て如何なるものであるかを研究中でありますから、今日は猶ほ甚だ不完全ではありますが其の大要を申上げて謹で滿堂諸君の御批評を仰ぐ次第であります。

普通に所謂幸福とは仕合せが好いと云ふ事だ、運が良いと云ふ事である位で解つた事にして居りますが、抑〻幸福は總ての人の欲するもので幸福卽ち人生であるとも云ふ事が出來る位大切なものでありますから、眞に處世の秘訣を解するには其の幸福の意味を今少し深く掘り下げて其眞髓を理解して置かなければなりませ

ん。

そこで先づ既に世に著はれた幸福に關する書物を一通り調べて見ますると幸福の解釋の仕方は人によつて種々異つて居る、中には「幸福は卽ち快樂である」と斷じ、或は「幸福は百欲離脫の狀態である、卽ち心の平靜なる場合である」と稱し、或は「幸福は其人の理想が實現した時に生ずる滿足の感情である」と云ひ、或は又「幸福とは其人に快感を伴ふて居る狀態である」とか、又は「安心して樂める狀態である」とか、或は又「精神が完全なる狀態卽ち統一の有樣に在る狀態である」とか、又人によつては幸福(外物に據る瞬間的の幸福)と景福(完全圓滿なる精神の滿足卽ち永續的幸福)とを區別するものもある、特にアリストテレスが「人生の目的卽ち至善は幸福であり幸福は道德的活動なり」と云はれし事やトルストイが「幸福とは自然と共に生き且それを見それと語る事である」と云ひ後には「幸福とは他人の爲めに盡す事だ」と云ひし如き、數へ來れば一晩かゝつても盡きない程澤山あり、何れも其時代と場所とに應じて一理ある名句ではあるが今日の時世にピタリと合つて一般民衆の標準となす可きものゝ無きを遺憾とする、そこで私は敢て從來の學說に囚はれずに專ら自分が今日迄の體驗に卽して直覺的に幸福を論じて見ます。

私の體驗によれば幸福は其要素として次の六つの條件が必要である、其第一は身心の健康なる事である、身體の健康な人は小事に屈託せず、神氣常に爽か

に活力横溢し、喜んで其職務に當り容易に其職業を道樂化することが出來るのであるが、身體の弱い人は心鬱し、氣萎え仕事に懶く厭き易く、兎角神經質となり、憂ふべからざるを憂へ、怒るべからざるを怒り、終には人を呪ひ、天を恨む樣にもなるのである、斯くなつては富貴榮達も何等の意義なく、美衣美食も何等の價値を有ちませんされば何ものにも代へ難きものは健康の二字であることは一朝健康を失つた時に何人も痛感する事實であります、私共が數年前から健康第一主義を稱導する所以も實に玆に存するのであります。

古語に「健全なる精神は健全なる身體に宿る」とあるが由來身體と精神とは二つの別物にあらずして全く形影相離る可らざるものだから身體の健康を圖るには同時に精神の健康を圖らなければならない、精神の健康を圖るには、一面には神經系の養生に注意し他面には精神の修養に努めなければならない、而して其神經系の養生には快く働き、快く休み、快く眠り兼ねて酒煙草を節し且花柳病等のために神經を害せざる樣心懸くる必要があります、又其精神の修養とは自分の良心に疚ましい事をせぬ事で、詳く言へば公明正大、正しき道を行き、正しき規に從ひ、仰いで天

に愧ぢず俯して地に羞ぢず、些かの煩悶も執着もない心持で生活らすことであります。

由來生命のない器械類は之を使へば使ふほど磨滅するが、生き物である人間と云ふ器械は之を使ふ程丈夫になるものであります、即ち生活體は適當に之を使用すると單に其の成分が損失せざるのみならず却つて其新陳代謝が旺盛となり、其結果體中に於ける補償建設の作用が增進し、それと伴ふて全身の機能も亦向上發達するものであります、されば人として若し其身心の使用を怠り、遊惰安逸に耽けるに於ては、其身心の組織は萎靡し、機能は頽廢して病弱となるのであります、隨つて幸福の要素の第一たる身心の健康上にも努力が必要となるのであります、兎に角如何なる場合にも幸福には其健康に反せざる事が必要條件であります。

次に幸福の要素の

第二は自己の欲望の滿たさるゝ事で、解り易く云へば自分の望みが叶ふ事であります。

然かも人の欲望には色々な種類と程度があり、且人と場合とにより一樣でない、人

に依つてはむやみに金持になるのを望むものがあり、或は又位階勳爵の高きを欲するものもあります、反之、金の不寢番に苦んで頻に貧乏の心安さを羨み、或は又位階勳爵の煩きに懲り〳〵して暢氣な田園生活に憧憬る者もある、又平素病弱な人は何物よりも身體の丈夫なのを望み、子の無い人は何ものよりも子寶の出來るのを願ふと云ふ樣に、人は現在自分に滿たされたるもの、滿たされたる境遇には滿足せずに卽ち幸福を感じないで、却つて自分の持たないもの、有たない境遇を欲求する癖があります、又同じものでも古いものより新しいものを欲求する所謂好新性なるものがあつて、それが一面に於て進歩發展の動機にはなるが、時には此好新性を濫用して疊と何とかは新しいに限る抔と云ふ不心得の望を懷く者もある、尤も最早前途に影の薄い老人になると書畫骨董何でも古いものを好むと云ふ欲望も出て來る、又同じ事を同じ人が先には幸福だと感じ後には不幸と感ずる樣になる事もあります、彼の大地震の際、燒死の災を免れて何より命の助かつたのが難有いと其時には身の幸福を感謝した人が、數年後の今日になり震災で財寶を失つた事を惜み悲んで居る者も少くありません。

嘗て京都丸山の大火事の時に多くの人が泣き叫び乍ら家財道具を擔で逃げ迷ふのを四條の橋の下を定宿とする親子連の乞食が眺めて居ましたが、嘲て子乞食が「ちやんや俺達は斯う云ふ時にも安心して寢て居られるから仕合せだねー」と云ふと親乞食が「それも親のお蔭さ」と言つたといふ話がありますが、實際時と場合と氣の持樣次第では金持よりも乞食の方が安樂で幸福だと感ぜらるゝ事もないではない、併しながら極少數の人を除いた一般人の欲望は先づ世間並以上の生活をする事に置かれてあるから一般的普通の幸福とは世間並以上の生活をなしつゝ其欲望の滿たさるゝ狀態であるとも云へるのであります。

然るに哲學者や風流人になると一簞の食、一瓢の飲、肱を枕にして眠る樂亦其中にあり抔と高語したり、風流は實に寒いものと悟り「倉實つて障るものなき月見かな」で家屋敷や財產は眞の風流には邪魔だと云ふ者もある、特に學者宗教家には金錢や物質の欲望を輕視して精神生活のみに憧れ、眞に淸貧を樂む者もあるから、欲望は物質的と精神的の二つに區別する事も出來るが其れは普通便宜上の區別であつて、私共の信ずる所では物質(特に肉體)がなければ精神の宿る所もなく、又如何に精神的修養の出來た人でも永く食はずには居られないのだから、決して物質を輕視する譯にはいきません、併し「心こゝにあらざれ

ば視れども見えず聽けども聞へず食へども其味を知らず」で精神がなければ物質の存在を認むる事も出來ない、卽ち精神が無ければ物質も無い事になります、故に私は精神（卽ち心）も物質も一元不二なものと信じます、隨て私は物心一元論或は靈肉一元論を信ずる、されば私の謂ふ欲望とは精神物質兩界に共通するものであるのだが、之を解り易くする爲めに便宜上二つに別けてお話しする場合もある事を斷つて置きます。

次に幸福の要素の

第三は自己の努力による事であります、卽ち幸福は自己の欲望の滿たされたる狀態には相違ないが、其欲望の滿たさるゝに自分の努力による場合と偶然の場合とがある、所有て居た土地や株が偶然に上つたとか、忘れて居た親類の遺產が轉がり込むと云ふ樣な、自分の働き以外の偶然の出來事から欲望の滿たさるゝ場合は、所謂是れ僥倖であつて眞の幸福ではありません、其證據には斯かる偶然に得た幸福の永續した實例がない許りでなく、却て種々の誘惑に襲はれて其幸福は破壞され自分もいつか怠惰放逸となつて僥倖以前よりも悲慘な境遇となるものであります、縱令自分の深い愼みや周圍の人々の注意監督により暫時は繼續が出來たとし

ても、僥倖者自身既に努力の賜でないことを知つて居りますから、何時又偶然の出來事から煙にされはすまいか、さうすると再び自分には造れないから不幸の境遇に落ちなければならんと、常に不安を感じ決して外から見る樣に眞の幸福感謝に浸り得るものではありません、反之自分の努力によつて得たる幸福は假令其分量は少くとも心に與る快感は絕大なものであるから、それが度重なるに隨ひ遂には自己の努力一つで自分の幸福を增大し得ることを悟り、內心愈〻快活となつて益益勇氣を生じ、遂に偉大なる成功を遂げ大幸福者となり得るのであります、されば幸福は欲望の滿たされたる狀態だとは云へ、其れが其人の努力により實力で得たものでなければ眞の幸福とはならないのであります。

次に幸福の要素の

第四は心の感じ方であります、則ち自分で自分の心に快感を覺ゆる狀態でなければなりません、多くの場合は吾々自身の心の感じ方一つでそれが幸福にもなり不幸にもなるのだから、吾々は先づ以て總ゆる場合を幸福に感ずるやう精神上の修養が必要であります。

吾々は外部に起る事情を變更する事は出來ないが自分の心持を取り直す事は容易であるのだから、若も物事が自分の望み通りにならない時は、先づ吾々の欲望を抑制て之を取り直す事にすればよいのである、例令ば巨富豪奢の生活の如きは誰にでも容易に出來るものではないが、そんなむづかしい慾望を打ち捨つることは誰にでも出來るのであります、また眞面目に考へて見れば今迄望んだ事が如何に詰らない馬鹿らしい事であつてそんな望みに苦勞するよりは自分に出來易い望みに努力する方が幸福であるのを悟る事が出來るものであります。

又一歩を進めて考へて見れば貧乏といふ事は自分の欲しがるものが所有出來ないと云ふ事であるから、假令貧乏して居ても足る事を知り自分の力量を知つて無理な望みを起さずに何も欲しがらない人は已に貧乏ではなく富有な人と同じなのであります、反之欲の深い人は常に望みが多く、中々其望むものが所有出來ないから却つて心の内は貧乏人であると云ふ事が出來ます、されば吾人は精神の力で境遇を支配し外界の不如意を精神界の如意に轉回しなければなりません、然るに境遇のみで其心を支配さるゝ如き人は假令其境遇が改善せらるゝ事があつても不平不滿は次から次へと頭を擡げて來て生涯滿足して幸福を感謝する事の出來ないものであります、要するに幸福を自分の心で自由になし得るに至ればそれは實に幸福に難攻不落の要塞を築くものであり又實に幸福の主權者となつたのであります。

斯く論じ來れば幸福は自分の心の内にあるもので外には關係のない樣にもなりますが、吾々の實際生活には心の生活の半面に物質の生活があるのだから其物質の方面には單に氣分だけでは足りない、悟るだけでは駄目で或る程度を超えれば是非共實行し實現しなければならないのであります、即ち如何に聖人君子でも食はずには居られないのだから、吾々は一面努力實行によつて物質的に滿足を得る事と心の修養によつて精神的に滿足する事の二つの滿足によつて初めて吾人人生の幸福が實現するのであります、されば又心の内に得たる幸福は實行で完成せらるゝものとも云へます、則ち人は自分の實行能力と自分の心持とに相應しい生活を送る時最も完全なる幸福となるものであります。

斯く幸福には精神的と物質的との兩方面の滿足を要しますが、其物質的の欲望は動もす

れば其度を過して却て不幸になり易いから十分の注意を要します、實際私の家庭では物質的の欲望は成るたけ最小限度で滿足する事として居り、特に衣食の如きは成るべく眼と氣分だけですます事にして居ります、例令ば衣服抔は呉服屋の硝子窓の外から眺めさせて氣に入つた衣服があれば望み通り買ふ事に贊成はするが、それを買つた氣分にさせるだけで品物は其儘その店に預けて置き、是非共その品が無くつてはならなくなる時迄は其の代金を銀行に預けさせて置きます、又食物抔も同じ主義で毎晩のやうに町にも散歩に行きますが、妻や書生に菓子屋の窓で此大福餅は甘さうだ何箇たべるかと聞きそれだけあげるから能く食べた氣分になれと云つて毎晩馳走します、それでも大抵仕舞には澤山になつたと云ふ氣分になります、過日も青山通りで食物は澤山になつたから植木が買ひたいと促がしますから、花屋の前に行きましたが秋海棠の一鉢が氣に入つたと云ふから、例の通りほしければ買ふさと云ふと、こゝは生憎硝子越でなく店先に並べてあつたので家内が早速手に持ちかけますから、おい〳〵氣分で買ふのだぞ、それを家に持歸つて枯らした抔小言の種子を播くより此店に預けて置けば水も忘れずにやつて呉れるし、見たければ何時でも來て見らるゝのだからと申しまして、幸ひ店の人が傍に居なかつたから氣分で買つて歸つた次第であります、斯く物質的の欲望はなるべく眼と氣分だけで滿たすことにすれば頗る經濟でもあり、又人に羨まれたり、冒、病、になつたりする事もな

く萬事好都合であります。

次に幸福の要素の第五は常に比較的進歩的な事であります、私が苦學生時代に初めて一杯の天丼に有りついた時この上もない御馳走として其幸福を感じた餘り、其時の日記帳に「……叔父に伴はれて上野廣小路の梅月で天丼一杯馳走になる、もう一杯食べたかりしも遠慮して置いた、其價三錢五厘なり、願くば時來つて此天丼二杯づゝ食べる樣になれかし」と記しましたが、後日外國から歸つて來て一度に二杯註文した處一杯でまいつて了ひ、期待して居つた天丼二杯も最早私に幸福を齎さなかつた、又一萬圓の身上の人が二萬圓になれば幸福だと感謝するが三萬圓の身上の人が二萬圓になれば不幸だと悲む、又無一物の人が僅か數百圓の身上になれば大なる幸福と感ずるに反し、百萬千萬の長者でも慣れては何の幸福をも感じなくなり却つて其上の欲望を懷くものであります。

要するに欲望は絶えず向上し進化し且つ欲望の滿足は常に比較的でありますから、小より大に、下より上に、後退せずして漸次に進まなければなりません、即ち幸福

は進歩的比較的のもので、決して固定的、永久的、絶對的のものではありません、隨て一度幸福を得てもそれをそのまゝで永久に持ち續ける事は出來ないのであつて必ずや自己の不斷の努力により之を保ち且向上て行かなければならぬものであります。

又人は艱難と戰ひ辛苦を嘗める時最も強く精神が緊張して勇壯活潑となるのである、而して其勇壯活潑なる行爲が進んで將に目的に達せんとし所謂峠が見えた際が最も強き快感を覺ゆるものであります、然るに一旦其峠に達し勝利を得るや忽ちに精神が遲緩し急に元氣がなくなつて不活潑となり、臆病となり徒らに過去の悲劇抔を思出して悲觀的となり所謂勝利の悲哀を感ずるものであります、されば人は平和安樂に安んずるよりも寧ろ絶えず其理想に向つて精進努力するこそ却て幸福なのであります。

彼の華族や大金持の二代目以下が、子供の内は活々して如何にも活潑であるが一度當主になると大抵活氣を失ひ愉快相な顏付が少くなるのは、全く其幸福が固定して居るためで、他からは幸福さうに見えても、本人は甚だ不快であり不幸である

と云ふ證據であります、加之人の健康は幸福の基礎であるのに、金持が健康になるには貧乏人と同じ樣に簡單質素な生活をしなければならない、然るに其れが苦しくて遂に怠惰になり、病身になり、人間幸福の基礎を壞し易いと云ふ事も其一つであります、尙又幸福は望の叶ふた狀態であるのに、貧乏人には小さな望みが多く比較的叶ひ易いが、金持には望みの種類が少なく且つ其望みが容易に叶はぬ事許りで却つて盜賊だの火事だの恐るべきものゝ方が多くなりますから、自然心配も增し不幸となるとも云へます、尙又物の價値卽ち難有さは其量に反比例するから同じ握り飯でも山盛に出さるゝより半分わけて貰ふた時の方が難有さが多いと同じく、同じ物でも貧乏人は少しづゝ持つから難有味が多い、卽ち他人の見るよりも貧乏人は幸福を味ふ機會が多いとも云ふ事が出來ます。

特に筋肉勞働者は血液の循環も良く食欲も旺盛であるから燒芋が羊羹の代りをなし澤庵に刺身の味が出て一杯の天丼は金持が食ふ帝國ホテルの料理よりも甘い、終日働いて妻子が首を長くして待つて居る吾がアバラ屋へ急ぐのは、金持が料理屋から自動車で、角を出して居る令夫人の許へ言ひ譯の仕樣を心配しながら歸

るよりも何程幸福であるかわかりません、さればとて幸福は獨り貧乏人にのみ限つたものではなく、誰にでも同樣に惠まれるものであります。

然れば華族や金持の子弟が幸福になるには何うすればよいかと言ふに、それは自分の努力で其欲望を滿たす樣にする事であります、卽ち家柄や習慣に囚はれず、親讓りの財產抔は的にせずに自分の生活は自分の働きで營み、所謂不勞所得に依らず勤勞所得で生活し、然かも其勤勞所得の增進に伴つて其生活を漸次向上させて行く事であります、特に自分が生活上の心配無しに何事も出來得る境遇であるのを感謝しつゝ大に學問もし修養もした上、成る可く貧乏人に出來ない方面の欲望を滿たすこと私の所謂其富を精神的享樂に使用する事であります、卽ち直接物質上の利益はなくとも精神的には大に愉快である所の慈善敎育其他社會公共事業に盡すを以て至上と致します。

思ふに現代日本の憂患は貴族富豪の二代目三代目以下が己の生活が安定なるに心を緩めて努力を失ふて居る事であります、抑々成功した人は元より其人一代の努力によるものでありますが、その一部は其父祖の努力した性質が遺傳的に蓄積して其人に傳つた結果

であります、從つて成功者の子は其親が受けた以上更に親の分迄加へて成功すべき眞き遺傳を有する筈であります、されば其子にして親同樣に努力するに於ては當然親以上に成功すべき理でありますが、悲しいかな其境遇が餘りに安樂である爲め自然精神にも行爲にも緊張を缺き怠惰遊逸に流れ遂に不成功に終り不幸に陷るものであります、されば世の成功者たるものは其子孫の幸福上特に深甚なる注意を注がねばなりません。

要するに幸福は親から讓られ得べきものでもなく、他人から貰へるものでもなく、又決して偶然に得らるべきものでない、只自分が目的理想の下に努力しつゝ漸次其理想を實現して行く途中に自分の味ふのに相應はしい幸福が生ずるのであります、隨つて一度成功したからとか、又は最早働く必要がないから隱居する抔と云つて努力を止めるに於ては幸福は忽ちに逃げ出すものであります。

されば隱居して樂をしようなど思ふ事は畢竟その心身の怠慢惰弱になつたと云ふ證據でありますから、爲めに體も心も弱つて來て容易に病氣にかゝり早死する筈であります、隨つて隱居は恰も墓の中へ永久の休息に赴く第一歩であると言はねばなりません、實に釋尊が「勤勉は生くる道にして怠惰は死の道なり、勤勉の人は

死する事なく怠惰の人は既に死せるが如し(法句經)と云はれたる如きは此の所以である。

抑、快樂の價値は苦痛との反對から起るのであるから快樂は苦痛を離れては味ふ事が出來ない、若しも吾々が苦痛を全く無くして仕舞へば快樂も亦無くなるのだから却て或る程度迄は苦痛があつた方が幸福の價値を高める事恰も惡が善の價値を高め寒が暖かさの價値を上ぐると同じ理であります、隨て此世の中に絶對の安樂や絶對に苦痛のない生活を望むのは又絶對に喜悅のない幸福のない生活を望むと同じで、死んだ人と同じであります、人生として是れ位馬鹿氣た事はありません、實際此世の中には悲しい事も苦しい事も幸も不幸もあるので面白いのです、それで人格の修養も出來て眞の人間味が味はるゝのであります、唯吾々は常に大勇猛心を以て其悲みや苦しみや不幸を十分に耐へ忍んで之に打ち克ち常に苦痛を通しての喜悅、努力を通しての幸福に浸り得る所に初めて人生の難有味があるのであります。

私は多數の人に解り易い爲め玆に悲みを通ほしての喜び、努力を通ほしての幸福

と云ふ語を使ひますが、實はそれに馴れゝば遂には「通ほして」と云ふ語が不用になり一足飛びに悲み卽ち喜び、努力卽ち幸福と變じ、結局總ゆる悲痛を堪へ忍び之に打ち克ちつゝ努力する間こそ眞の幸福であつて、それが止めば却つて幸福は味はれなくなるのであります、換言すれば如何なる悲痛も俺は之に打ち克つぞ、堪へ通ほすぞと云ふ勇氣が出ると同時に已にそれは悲みでなく喜びとなるのであります、されば努力を通ほしての幸福に慣れた人には努力が道樂になり努力其ものが直に幸福と感ぜらるゝのであります。

それに就て面白い話は私が三十餘回造林學の實地指導に行つた房州清澄山に靈驗顯著なる虛空藏尊があつて、其山下の天津町の信心家の一商人が虛空藏尊に永年日參を續け商賣繁昌して居りましたが、漸く年老いて登山が苦くなつたので遂に虛空藏尊身代りの石佛を、家から見える山の上に勸請して、毎日自宅に居ながら禮拜する事にしましたところ、忽ち腰が拔けて了ひました、そこでこれは歩く事を止めた佛罰だと感じて、立たぬ腰を無理に人や杖に縋つて日參を始めると、再び腰が立つて達者になり、九十餘歲迄も長命したと云ひ傳へられて居ります、これ抔は眞の信心、卽ち努力の賜であると云つてよいと思ひます、其傳說の石佛の首が脫けて失はれてあつたのを、先年私が新調してすげて上げま

した、其功德から私の足が達者なのだと云ふ人もありますが、私は何も足の達者になるのを願つてしたのではなく、其傳說の意味が信心に努力の必要な事を證明したものであるのを貴しとしたのと、又一つには自分が造林した山の上の石佛が首無しでは風致上からも見苦しいから首をすげて上げたに過ぎないのであります。

要するに人の心身は使はずに居ると役に立たなくなるものであるから永く健康であり幸福でありたいと思ふならば出來るだけ心身を働かせるより外に道はありません、勿論茲に働くと云つても老人に對して若いもの同樣に勞働せよと云ふ譯ではなく、肉體的なり精神的なりに夫々自分に相應して出來るだけの働きをすると云ふ事であります。

次に幸福の要素の

第六は社會の希望に反せざる事であります、私はこれ迄に、幸福は自分の努力によつて精神的並に物質的に欲望の滿たさるゝ狀態である事を述べましたが眞の幸福は自分の欲望の滿足丈ではまだ十分でないのである、山中孤獨の生活をなす人間ならいざ知らず、我々は互に社會を形造つて生活して居るのだから自分の欲望を滿たす行爲が他人のそれと調和を缺いてはなりません、若も夫が社會の希望に反する樣であれば、何時かは他人から妨害されて自分の幸福が破壞される事になります、隨てそれが社會的に共存共榮であつて自分の欲望も滿足され同時に他人の希望も滿足されると云ふ所に初めて完全な幸福が味はるゝのであります。

此點から見て自分に出來るからと云つて必要以外に立派な大邸宅を構へたり人の羨むやうな華美な服裝や贅澤な生活をするのは民衆の反感を買ひ社會の希望に反する譯になるから其人の幸福を完成する所以ではありません、然らば、成功せる大富豪はどういふ風に生活せばよいかと云ふに、今日宿無しや貧乏人の多い市中の生活には此等の人に反感を與へぬやうに外から見て餘り人の目を惹かぬやうな質素な屋敷構へにし只其內容を文化的に充實せしめ、それで猶ほ餘裕があれば市街の紅塵から遠く離れた山間又は地方の景勝地に大邸宅を構へて別莊又は保養地となし、然もそれを自分の使用に差支のない限り公開して民衆の用に供し以て其地方の繁榮榮榮にも資する事であります、歐米大富豪の生活は近來大抵此方針の下に行はれて居ります、然も其地方の大邸宅は主人歿後には其敷地と共に之を其地方又は國に寄附して公園又は美術館等とし永久に保存せられ、其地方の名所ともなり同時に永く其寄附者の記念碑ともなるのであります。

又之を法理の上から見ましても今日の財産私有制度なるものは畢竟社會全體の幸福と抵觸せず調和する範圍内に於てのみその意義を有するもので、法律が各人に財産を私有せしむるのは獨り其人一人の幸福の爲めのみでなく同時に社會全體の幸福を目標として其人に財産を信託して居るに過ぎないのであります、故に若しも其人が信託の本旨を忘れて之に違反する樣な事があればそれこそ反つて財産私有制度の本旨に背くものであります、然るに今日の實際は各人が自分の必要以上に多くの物を獨占し、或は之を他人に對する自己權勢の具に使ひ或は多くの人々が物資の缺乏に苦しみつゝある際自分だけがそれを知らざる如くに振舞つて貴重な物資を浪費するが如き、眞に是れ財産私有制の根本義に反するものであるから宜しく本來の私有制度が其物資の使用上絶對的のいのでない事を自覺する必要があります、即ち今迄の如き絶對的の所有權觀念を改めて所有權本來の社會的意義を加味し以て社會の全員に均しく幸福ならしむる方法即ち所謂所有權の社會化を法律上にも規定する必要はありますが兎に角今日の富豪が眞正な所有權に目覺めて自ら進んで之に善處せん事を望むものであります。

以上述べ來つた如き六つの理由に據り私は結局幸福に次の如き定義を下します曰く

幸福とは自己の努力によりて其欲望が滿たされ心身共に快感を覺ゆる狀態

にして、然かもそれが自己の健康と社會の希望に反せざる場合を云ふ、而して幸福其ものは比較的、進歩的のものであるから日々新なる精進努力を要するものである。

(幸福の體驗と子孫の幸福に對する私見)私の體驗上悲みを通さなければ眞の喜びは味はれず、努力を通さなければ眞の幸福は得られないのであつて、然も其喜びや幸福の大さは悲みと努力の大さに比例するのであるから、吾人は吾人が遭遇する如何なる困難悲痛な出來事にも堪へ忍んで之に打ち勝つといふ勇氣を必要とします、自分は正しい生活をして居るのだから苦む譯はない、負ける譯はない、時節が來れば必ず勝つて幸福になれるのだと確信して居りさへすれば、如何なる難儀にも打ち勝つと云ふ勇氣が湧き出るものであります、實際私共の家庭にも幾度か無實の罪や悲痛な慘酷しい災難が循り來つた事もありますが、私は如上の體驗から常に惡い事悲しい事のみ續くものではない、自分達が正しく努力して居りさへすれば自然に時が解決して呉れるのだ、今此處を凌ぎ超しさへすれば必ずや反對に善い事になり喜び事に變るのだと、斷えず未來の光明を認めてじつと辛抱し努力

しました故か、外から見ては堪へきれない程悲痛な出來事も家内には案外不平なく過ごして來て一年々々と家庭の幸福が增進し來たつたのであります。

兎に角自分の一代は右の如き體驗を繰り返へしつゝ少しづゝ向上する幸福の道を辿つて來ましたが、爰に眞劍に考へさせらるゝ事は我子孫の幸福に就てゞあります、私共は自分がひどい貧乏の苦痛をなめて來た體驗から子供達だけにはさう貧乏はさせたくないと僅かながら準備して來ましたが、今茲に幸福とは何ぞやの研究をして見ますると幸福は親から讓る事の出來るものでもなく、又偶然に得らるべきものでなく、獨り本人自身の斷えざる精進努力による外に途はない、自分自身で努力しなければ決して幸福は得られないと云ふ事が判然解つて來ました、況して今後は遺産相續稅率の遞加、又は遺産の大部分を國に沒收する法案等によつて事實多くの財産を子孫に讓る事が出來なくなるのみならず、假令讓り得たりとするも必ずや强大なる不勞所得稅の新設等によつて、親讓りの財産抔は何等利益なき樣になり、其の代り誰でも努力さへすれば容易に相當の幸福を得らるべき時世となるに相違ないから、結局其子孫を幸福ならしむる唯一の方法は其子孫をし

て自分自身に努力せしむるより外はないのであります、然るに親が如何に努力を勸むるとも其子孫に努力の必要がなければ努力する氣にはなれない筈で、私が今日努力主義になつたのも畢竟私の境遇が努力しなければならない立場にあつたからで、若しも私に澤山の遺産があつたならば蓋し努力の體驗抔は出來なかつたに相違ありません、トルストイも云はれた如くすべて必要以上に與へられた生活の餘裕は、子供達を怠惰放縱淫蕩に導く最大の原因であります、彼の西鄕隆盛が兒孫の爲めに美田を買はずと云はれた事は眞に味ふ可き言であります、然れば子孫を眞に幸福ならしむるには其子孫を努力し易きやうに敎育し、早くから努力の習慣を與へ、且努力の必要な境遇に立たしむる事であります、それには子孫を先づ第一に健康體に養育して如何なる努力にも容易に堪へ得るやうになし、第二には出來るだけ早くから自分で自分を始末して行く努力の習慣卽ち獨立自彊の習慣をつけ、第三に其子孫の天性を助長發揮せしむる如き敎育を施すにあります、然も初めは實際生活に必要なる精神敎育と職業敎育を授けて何時でも獨立生活をなし得る礎地を與へ置き、其上に何等か特に發揮すべき天性のある子供にはそれに適

する高等の教育を授くる事であります、要するに子孫には自らの努力で獨立生活をなし得るやうな身體と習慣と教育とを與へて獨立し得る迄の間だけ親が保護し其後は各、自分の努力で其運命を開拓せしむる樣に爲すのにあります、隨て其生活上毫も努力の必要がないほどの多くの財産は之を子孫に遺さない事にしなければならぬ、縱令親が多大の財産を有する場合にも前述の教育以後には其子供が萬一不具や病身になつた場合に世間並の單純生活をして行けるだけの財産のみを殘し、他は全部之を慈善、教育、公益財團其他の社會奉仕に提供する事にしなければなりません、之が私の今日迄考へ拔いた我子孫を幸福になす唯一の方法でありますが、茲に注意すべきは此原則は成るべく早くから子孫の頭に沁み込ませ且それに適するやうに訓練して置く事であります、初めに安樂有福に育てゝ置いて後に此主義を實行するは眞に子供を愛する所以でありません、されば縱令親達が成功したからとて多數の召使を使用し、贅澤な生活を營んで居ては、其家庭に生長する子供は自然に安樂な生活に慣れて精神の緊張を缺き努力の習慣を造る事が出來ないから、成るべく早く、遲くとも學齢に達した頃から他の單純生活の家庭に寄

宿せしむるか、又は普通の寄宿舍抔に入れて生活せしむるのがよい、然し若しも眞に其子供を愛するならば自分達の家庭を極めて質素にして世間並の單純生活になし、早くから其子弟に其家業の手傳や掃除、取次、使走り、炊事其他家庭の手傳をなさしめ獨立生活の慣習を付けなければなりません、又家庭に女中や書生を置く場合にも吾が子供をそれ等雇人と同一に待遇し同一の生活になし、同一仕事を分擔せしめ、以て其雇人にも勉學の餘暇を生せしむる如きは最も望ましい事であります。

尙注意すべきは其子孫が獨立後、若し其事業に失敗する事あるとも、親は決して物質的に之を救濟せざる事であります、失敗は成功の母であつて實に前よりより多くの知識と努力とを以て、更に新たにやり直すべき事を暗示する大切の教訓であるから其教訓を空しくせしめてはなりません。

されば其子孫の獨立後は、如何なる場合にも親から物質的の保護を受けない事、又受ける事の出來ないのを初めより眞に覺悟せしむるを要します、若し然らずして貴重なる失敗の教訓を體驗せしめず、親が容易に失敗を救濟するに於ては、其子孫

は常に依賴心の爲めに其事業に眞劍になれないから、當然幾度も失敗をつゞけて、遂に自己の努力で成功せる眞の幸福を味ふ事が出來ず、親の老廢後又は死後に至つて大失敗をなし、其時には本人もいつしか壯齡を過ぎて、最早再起の力無く、遂に一生涯不幸に終る事になります、抑〻幸福は比較的のものだから人は一生の中一度は早いか遲いか苦しまなければ眞の幸福は得られないものである、されば其子をして成るたけ早い內に貧乏や苦痛の體驗を嘗めさせて置く事が親が子に對する大なる慈善であると云はなければなりません。

特に注意すべきは世間によく見る老人が孫子を盲滅法に可愛がる事である、自分に餘裕あるに任せて孫子の愛に溺れ、一寸疊の上に轉んでもすぐ起してやつてその獨立心を妨げ、又孫子に美衣を着飾らせたり、無益の遊藝や虛榮の敎育を施して老人の誇りにしたりする、其志はとも角何も知らぬ子供こそいゝ迷惑な話で、遂に老人の爲めに獨立心の貧弱な意氣地無しとなり果てゝ、社會の生存競爭に堪へず一生不幸の身となるのであります、世にバヽッ子は三文安いとか、藝は身を助くる程の不仕合とか、賣家と唐樣で書く三代目抔と云ふ事は、何れも老人や富豪の盲愛が其孫子を不仕合になす事を意味するものであります。

之を要するに親は其子孫をして前に述べたる幸福の定義を十分に了解せしめ親も亦此定義に違反せざるやう、徒らに親の愛情に溺れて其子孫を不幸に導かざるやう徹底せる理性の力を以て愛情を支配する事に努力する事が親として眞に其子を幸福ならしむる所以であります、私は小鳥を飼ふた事があるが、其卵を孵化して巢立ち際になつた時の樣子は如何にも可憐多情で吾人に敎へられる事が多い飛べぬ中は餌を哺ませてやるが漸く羽が利くやうになつて來ると容易に側へ寄せつけぬ「其處に飼がある ぢやないか自分で拾つて食つたら良からう」と云ふ態度を示して容易に盲愛に陷らぬ、心を鬼にして子供等に自活の道を考へさせるのである、人間の親として何時迄も其子を盲愛するは小鳥にも劣るものと云はなければなりません。

私が今日迄幾千の子弟を敎育し監督し來つた結果に據れば、富豪の子弟は其頭腦初めは大抵優秀であるが、動もすれば其精神に緊張を缺き努力せぬ爲めに漸次退化して何時しか遊戲に耽けり、又は戀愛文學抔に夢中になり、遂に酒色に溺れて中

途退學をなし、又辛うじて親の威光や金力で卒業出來ても其專門學はほんとうには解て居ないのだから、卒業と云ふ看板が却て自惚れ慢心の元となつて、有害作用をなし不幸に陷るものが多くあります、これ全く親が子に對する用意の足らざるに歸すべきものであります。

特に私が幾度か同情の涙に咽びし事は親が其盛な時代に子供に贅澤をさせ、家には、十分の財産があるのだから無理に勉强するには及ばない、健康を第一に措いてゆつくり勉强するがよい抔と云ふて聞かせ安心させて置きながら、後に大失敗をして其子供は一向財産を讓られぬのみならず却て借金を讓られた子供の身の上であります、元より親として子供の健康を慮かる志は難有いが、子供としては折角の少年時代に努力の慣習を與へられず、長じて後に急轉直下マイナスの身代となり、人並以上に努力しなければならない境遇に立たせらるゝ、人世是れ位悲慘な事はありません、勿論親は一生涯失敗抔する積りは無かつたに相違ありませんが、有爲轉變の世の中は思ふ儘にはなりません、特に成功と失敗とは裏表であつて大成功する人には大失敗をなし得る要素が具つて居るのであります、又幸に親が失敗する事なく、多大の財産を讓り得たりとするも、貧困を通らない子供には親が考ふるほどの有難味を感ずる事は出來ない、隨て得て浪費し易く、忽ち無一物となつて却て初めから財産を讓られない人よりも不幸となるのであります、されば成功した親達は一段と幸福の定義を知悉し眞に其子供の爲めに善處する必要があります。

私が多年人の子の師としていくら丹精して見ても幸福の定義の解らない富豪の子弟には決して世話甲斐がありません、反之貧乏人の子弟中の秀才は洵に世話甲斐があつて容易に成功させる事が出事るのは爭ふ可らざる事實であります、私が老來密かに貧乏人中の秀才教育を心懸けるに至りたるは此所以であります。

要之に今日の成功者が單に自分の成功のみに沒頭して其子孫に對する用意を缺くに於ては、啻に其子孫を不幸になす許りでなく、やがて其子孫が社會に與ふる罪惡は親の功績を帳消にして尙不足を生ずる如き事あるを覺悟しなければならない、實際今日花柳の巷に沈溺して風俗を壞亂しつゝあるは大抵生活の必要以上に多くの財産を與へられたる成功者の子弟なるを見れば遂に、成功者は其子孫をし

て社會を害せしむると云ふ結論も生ずるのであります、成功者の家庭が其老後又は歿後に不幸に陷るもの多きは大抵幸福の定義を解せざる結果であるから、成功者は自分の爲めにも亦子孫の爲めにも將又社會人類の爲めにも幸福の定義を十分に理解し之に違はざるやう努力しなければなりません、斯く觀じ來れば畢竟吾人自身が幸福に生きるにも又其子孫を幸福ならしむるにも、結局私の處世の秘訣に述べた職業の道樂化と生活の單純化並に富の精神的享樂より他に道はない事になるのであります。

前に述べたる幸福の定義中最も重要なのは欲望の滿足であるが抑、其欲望と云ふのは果して何であるか、卽ち欲望の本體に就き以下少しく之を考究して見ます。

吾人の欲望の多種多樣な事は已に述べし如くであるが其最も重要にして何人にも共通普遍なのは食欲、性欲、自由欲(他から制限されず自由に活動せんとする欲)の三欲であります、併し此三欲は何れも人生の表面に現はれた欲望であつてその裏面には之を生ずる根元が在ります、其根元は自分が生きると云ふ人間の本能であつて卽ち自己生命の持續と延長擴大とに外ならぬのであります、自己の生命を持

續るには食欲が必要であり自己生命の延長擴大には性欲と自由活動が必要であるからであります、抑、子は兩親の細胞が結合して成長したものであるから自分の子孫は卽ち自分の生命の延長であり、子孫の繁榮は自分の生命の擴大であります、而して現在我身の一切は之を其細胞と共にその子孫に遺傳します、隨て自分の行爲は自分の一身一代だけの利害得失許りでなくその子孫を通して遠く永劫に亙り廣く八方に關係を有します、されば吾人の生命は吾人に始まつたものでなく遠く祖先の生命の承け繼ぎで、更に此先も未來永劫に亙つて無限に生活し又無限に擴大せらるゝのであります、故に吾人は宇宙に存する無限の大生命の一分身たるを悟り萬人悉く自己の兄弟であり親類である事を知り世界の人類にあかの他人は一人も居ない事を悟つて眞の人類愛に目覺めねばなりません。

元來人の死ぬと云ふ事は單に人間と云ふ肉體の死滅するだけで人間の生命(卽ち人間の種族)は死なゝいのであります、其理由如何と云ふに人間の身體を形ちづくる組織に二通りあつて其一は人體が生きて行く爲めに働く細胞で之を體細胞と稱し(主として消化吸收、循環呼吸、分泄、排泄、運動、感覺等の機能を司る)他の一つは專ら種族繼續卽ち生命の延長

を司る細胞で之を生殖細胞と稱します、而して此生殖細胞は適當なる時期に勢力の將に衰へんとする舊肉體から分れ出て元氣潑溂たる新肉體卽ち子供を生成します、斯くして世々代々極まり止むことがないのであります、隨つて生殖細胞は確かに不老不死であり親より子に、子より孫に連綿と繼續いて行き親の體も、子の體も皆なこの連綿たる生殖細胞から出來て行くのであります、卽ち肉體は假の殿堂で、その中に齋き祭らるゝ御本尊は生殖細胞であります、只身體の中屍となつて死滅する部分卽ち體細胞が大部分で非常に目に立つが生殖細胞として活き延びるものは人の目に立たないから恰も死によつて人間と云ふ總ゆる物が消滅してしまうやうに感ぜらるゝのであります。

されば吾々の所謂死ぬと云ふ事は、單に人間の一部分否生命の容器の古くなつたものだけであつて、中にあつた大切な吾人の生命が其處に盡きるのではなく、其實は生れる前からあつた所の親の生命を分け繼いで來てそれを肉體と云ふ容器と共に成長せしめ其容器が老衰に至らぬ前に新に子孫を造つて自分と云ふ一代の容器だけは死んでも自分の生命の分身たる子孫が代つて自分の生命を延長し擴大して行く樣に出來て居るのであります、而して自分等が今生に於て自分の生命を持續じ之を延長擴大して行く事は是れ實に人生當然の行爲であつて私は之を

自然の道であり天の道であり又人の道であると謂ふのであります。

抑〻人生當然の行爲は總て正であり、善であるから、私は食欲も性欲も自由欲も亦善であると觀ずるが、唯其三欲を濫用し惡用するから惡いのであつて適當に之を善用すれば此三欲ほど難有いものはありません、人の成功も幸福も家庭の平和繁昌も社會の進步發達も此三欲の善用から起るのであります、隨て私は欲望特に性欲を以て罪惡や苦の根本と認め之を離脫するのが悟りの道である抔と云ふが如き消極的なる悟り方にはどうしても贊成は出來ません、實際私共が少青年時代に於ける「食ふに困らないやうに出世したい、美しい賢い妻を有ちたい」と云ふ欲望がどれだけ私共の努力に手傳つたかは想像に餘りあります、斯くも有益有力なる欲望を罪惡の根元として其離脫に努むるが如きは私の信ずる所の人道に背くものであるから私は自分にも此三欲を善用し人にも之を善用せしむるやう努力するものであります。

以上は主として肉體の無限生命を述べたものでありますが吾人の精神生活は更に肉體よりも廣大無限の生命を有つて居る、元より宇宙の大生命は其子孫によつて肉體的にも無限であるが其一分身たる一個の人生は時に其子孫を缺く事(卽ち子供の無い人)により其人一代だけで中絶する事はあつても其精神生活は他の幾

多の人生にまで擴大し延長せられて無限の生命を持續するのであります、特に今生に於て人並以上の努力善行をなした人は一般の人間と同じく生殖細胞によつて生理的に無限に生活し無限に擴大せらるゝ外、更に精神的に多數の人に感受せられ信仰せられて其精神は其多數の人の子孫にも言語や記錄により繼承るのであるから愈〻廣く愈〻強く自分の生命が延長擴大せらるゝものであります。

斯く人の生命は無限であるから其欲望も亦無限であつて其欲望の滿足卽ち幸福には無限の努力を要するのであります、隨て私共は私の所謂職業の道樂化を目指して奮鬪する努力主義に據つて怖れず避けず人生に直面し總ゆる人生の出來事を體驗し以て人並以上に自他の幸福に貢獻し假令今生の肉體は死し私共の墓標は朽ちる時あるとも私共の眞の生命は永劫に生き遺つて希くば「朽ちざる墓に眠り傳はる事に生き知らるゝ名に遺らん」とするものであります。

是で私の幸福とは何ぞやの義解と欲望の本體とは一通り述べ了はりましたが、結局幸福を得る元は努力であつて私の豫て主張する努力主義に一致するものでありますから私は是からこの努力主義を今日の遺傳學の上から檢討して見る。

實驗遺傳學と努力主義　墺人グレゴール・メンデル氏によつて稱導せられた實驗遺傳學の法則に據れば、生物の現はす種々なる形狀や性質卽ち形質は何れも其生殖細胞內に存する遺傳物質によつて決定せらるゝのである、而して遺傳物質は何處迄も變化しない獨立性のものであるが唯其遺傳物質の離合集散によつて生物各部の形質が決定せらるゝと云ふのであります。

實驗遺傳學の法則と變異　遺傳とは親の有せる形質を現はすべき素因(遺傳物質)を子に傳へると云ふ事で恰も親はその子に其所有せる財產は讓らないで親と同樣の財產を作る腕前だけを讓ると云ふ事であります、而して其大要は

(一)(優劣の法則)優劣の差ある形質の雌雄が離婚せる場合には優性の方が劣性を潛伏せしめて其子は優性の形質のものだけ生れる、例令ば黑犬(優性)と赤犬(劣性)とかければ其子は何れも黑ばかり出來る。

(二)(分離の法則)雜種二代目には兩親の形質は分離して優性のもの三と劣性のもの一の割合に出來る、例令ば前の例の黑犬と赤犬とで出來た子供の黑ばかりを互にかけ合すると其子には黑が三匹と赤が一匹の割合に出來る、而して其赤と赤とをかければ幾代でも赤ばかり出來て固定する、又黑の方も其の三匹の內一匹だけが永久に黑色を固定

し他の二匹の黒は又々前の如く分離を續ける。

(三)(中間雜種)兩親の形質に優劣のない場合には中間雜種を生ずる、例令ばおしろい花の赤花と白花とかければ全部桃色が出來其孫には赤色一、桃色二、白色一の比例に分離する。

(四)(生物の變異)生物には遺傳性があつて子は親に似るが同時に又多少づゝ親と異つた子が出來る、之を變異性と云ひます、其の原因は外界(溫度、水分、養分、日光、地形等)の影響によるが然も此等環境の關係から來た變異は體細胞だけの變異であるから子孫には遺傳しない、然るに其の內部未知の原因から來る偶然變異(又は突發變異)と稱するものは之を子孫に遺傳する、稻や麥にも時々突然他と異なつたものが出來る、彼の闕取や神力、抔と云ふ品種や、花物の八重咲抔は何れも偶然變異で出來たのを增殖したものである。

以上の如き實驗遺傳學の法則は日一日と確證せられ、少くとも動植物に對してはかゝる配偶者の間にはかゝる性質の子供がどれだけ出來ると云ふ事迄數學的に豫定する事が出來るやうになりました、尙又遺傳物質は環境の影響で其本性を變化しないのであるから、親が一代の間に環境の作用で蒙つた形質の變化は其子孫

に再現しない(卽ち獲得性は遺傳せない)ものである事が證明せられた乃ち生物の總ゆる現象は遺傳物質で決定せらるゝもので白くなるも赤くなるも大小曲直皆其遺傳物質によつて約束せらるゝものであり、外的條件の如きは其約束を如何ともする事が出來ないと云ふ內的原因に一大保證を與ふるに至つたのである。

玆に於てか一部輕卒なる學者は動植物から實驗した此遺傳法則を其の儘人間に當てはめて人間努力の效果をも無視せんとするに至りました、曰く人間一生涯の經路は遺傳物質の配合で先天的に決定せられてあるのだから、吾人が今世に於て努力するとせざるとは何等關する所でない、良い遺傳を持つた人は捨てゝ置ても偉くなり、惡い遺傳の人はどんなに努力しても駄目なのであるから結局努力は無用であると云ふやうな意見を眞面目に發表する人さへ出るやうになつた、若し果して斯の如くならば敎育も宗敎も衞生も從來爲し來つた人間一切の努力は無意義なものとなり了らなければならないのみならず、私の所謂努力主義も根柢から覆されなければなりません、是れ私が特に此一題を設けて實驗遺傳學と努力の關係を說明せんとする次第であります。

成る程之を動植物の上より見れば遺傳物質の具合で心身の性狀が先天的に豫定せらるゝこと、將又其の遺傳物質なるものが環境の影響によつて變化しないことも動かすべからざる事實である、而して其事實は人間に對しても內的先天的素質が如何に尊重すべきものであるかを敎ふるものであるが、併し其のことが一切の後天的努力を否定すべき理由には少しもならないのである「玉磨かざれば光なし」とは今尙間違なき眞理であります、但し從來磨くと云ふ事のみに力を注ぎ磨きさへすれば瓦も玉となると思つて居たのは大なる誤でありました、いくら磨いたとて所詮瓦は瓦に止まるのである、最新の遺傳學は的確に其然る所以を明かにしたのであります、隨つて濫りに磨くことを止めて先づ以て磨かんとする材料を吟味する必要を敎へたのであつて、磨くことを全然止めよと敎へたのでは斷じてありません。

由來遺傳に關して世人は屢〻誤れる考に陷つて居ります、或る形質が遺傳すると云ふことは其の形質其ものが遺傳によつて直接其儘に子孫に現はれて來ることと思つて居るが、事實は決して左樣ではなく、親から子に讓らるゝ遺傳物質は未發の狀態にあるもので斯の條件の下には斯の如き花を開き、彼の條件の下には彼の如き花に、咲き得る蕾に比すべきものであります、隨て遺傳物質なるものは後の環境の影響により或る程度迄はかうもなり、あゝもなり得る餘裕が具はつて居るのであります、實際同じ種子でも其土性や培養の仕方によつて其出來榮えの上に非常な相違を起すのは誰しも知つて居る通りであります、されば種性が動かすべからざるものであるからと云つて環境假令ば培養法を忽諸にするのは此明瞭なる理法を忘れ、其效果を無視した愚な行であります、況んや人間は動植物と異つて有機生活で直接遺傳する事の出來ない努力の效果を精神生活によつて十分に遺傳せらるゝに於ては動植物に於ける遺傳の法則を其儘人間に應用するは誤れるの甚だしきものと云はざるを得ないのであります。

卽ち人間は世々代々修養し努力しつゝ一歩一歩文化を向上せしめつゝあるが、その文化を有機生活によつて直接子孫に遺傳することは出來ない、世々代々人間の赤子は體も心も眞に裸一貫の賴りない有樣で生れて來る、さりながら有機生活に於て授受することの出來ないその文化を精神生活によつて遺傳する個體生活によ

つて出來ないものを社會生活によつて讓與する、卽ち人間は言語を發し文字を作る事によつて世々代々造り上げたる文化を言語により文字に誌して、後代に遺すのである、而して此言語文字の寶庫から子々孫々が各自の努力によつて總ゆる精神的の遺產を思ふ儘に攝取し繼承し得るのである、而して此が媒をなすものが卽ち敎育であります、斯くして現代の小學生徒は二千年前最も賢き人であつたアリストテレースよりも、遙に賢くなり得るのである。

若も人間が動植物と同じく父祖の遺傳通りで之を改良する事の出來ないものであるならば人間の歷史に見らるゝ進步發達は到底出來ないものである、然るに事實人間は代々進化しつゝあるのは卽ち其の時代々々に於ける人間の努力が其遺傳をも左右し改造して行く證據であります、大閤秀吉、ナポレオン其他多くの英傑が何れも其祖先に同樣の英傑のあつたものはない、唯其本人の非凡の努力によつて大成したのであり、又今日の隆々たる文化も畢竟幾千年來吾人の先祖や父母の努力の遺傳し集積した結果に外ならないのであります、勿論人間と雖も人種の異なる黃色人が努力によつて白色人にはなれないが、已に體格の如きは體育によつ

て漸次立派になりつゝあるは爭ふべからざる事實であり、特に知能の點に至つては努力次第で容易に歐米人を凌駕し得らるゝ事は幾多の實例で明かなる所であるから、修養努力の人間に必要なるは云ふ迄もない事であります。

又彼の人間に對して彼は玉であり彼は瓦であると初めから區別するは不可能の事であるのみならず實は人間は白痴と狂人の外は誰でも磨けば玉となり得る素質を有するのであるが、唯其先天的に磨きの容易なる人と然らざるものとがあつて、所謂天才と稱せらるゝものは其前者に屬するのであります、されば一般人間には初め一樣に普通敎育を施しつゝ其間に於て特に其天才と認めらるゝものを選んで之に大に完全なる敎育を施すのが最も經濟的である事を今日の遺傳學が敎へたものと見るべきであります、要するに從來の如く外的關係のみに拘泥して磨きさへすれば誰でも同樣に容易に天才になれるものと信じて內的遺傳的素質を不問に附する事の誤れると同樣に、人間に動植物の遺傳法則を其儘應用して人間努力の效果を無視する事も亦大なる誤りであると云ふべきであります、而して才子才を恃んで修養努力を忽にするほど世に惜むべきことはない、實に今日人間

社會の幸福增進乃至國運の隆昌にも將又世界文化の發展にも此遺傳的に惠まれたる天才の大成せる働きに待たねばなりません、私共が豫て密かに計劃しつゝある秀才教育財團必要の根本的主張は實に是に存するのであります。

努力、努力、努力によつて人生は祖先以來蓄積せる努力の結果を繼承し、且之を增進せしめつゝ、甚だ頼りなく憐むべかりし人の子が鑢て其精神生活に於て萬物を支配し其首位を占め得るのである、洵に人生に於て努力なしには一事も成功する事は出來ない、何等人生の幸福を味ふ事は出來ません、努力し、尙努力する是れぞ實に人生であります、然も其努力は慣るればそれが苦みでなく樂みとなり遂に人生が道樂化するのである、而して其道樂化せる人生こそ卽ち是れ人生の至上であり極致であつて、直に是れ人生の極樂であり天國であるのであります。

尙深く進化(生存競爭適者生存による自然淘汰、入用の器官が發達し不用のものが退縮する事等)と遺傳の學理を究むるに於ては、人間が其初め單細胞からなめくじと同じ樣な下等動物に進化し、更にとかげや猿の先祖と同じ樣な體形を經て、遂に今日の人間に進化したのは畢竟變異と遺傳とに依つて起つたものなるを知る事が出來る、而して彼の動植物は全く自然の儘の變異と遺傳の左右する所に一任せらるゝが、獨り人間に限つては他の動植物の研究から其變異と遺傳の原因結果を知りし爲め、我々は我々の意志の力により我々人間の身體並に精神上に現はるゝ形質の內で、我々の生活に好都合のものを積極的に自分に發達せしめて之を利用し、且其形質を積極的に子孫に傳へ得るのである、反之其都合の惡い形質は消極的に之を發達せしめず、且つ之を除去する事も出來るのであります。

斯くして吾人は先祖から遺傳された形質を向上し進步せしめ得ると同時に吾人は他の動植物の持たない言語や文字の力をかりて互に知識を交換し、其知識を子孫に傳ふる事が出來るのである、而して此事たる廣き意味での遺傳であり、實際には教育となつて現はるゝのである、卽ち吾人は此の廣き意味の遺傳や教育により彼の生物全體に行はるゝ遺傳と變異を利用し今後益々向上發展するのであります。

然るに單に遺傳說だけに因はるゝ人は、環境や教育は生物の遺傳質を改良して子孫に傳ふる事が出來ないと云ふが、如何に良質の遺傳ありとも環境と教育が惡ければ其本能を發揮する事は出來ないのだから、結局人生に環境と教育の必要あるのみならず、人間には他の生物と異つて言語と文字が發達して其環境や教育で得たる素質を精神的に他人にも子孫にも遺傳する事が出來るのだから特に人間の進步に環境と教育の必要なるは明

かであります。

論じて茲に至れば結局彼の農業に於て良い種子を良い畑に良き手入で作ると云ふ事が最も大切なる眞理であると同じく、人間にも良い遺傳を選んで良い環境に置き良い教育を施すと云ふ事が最も大切なる條件となるのであります、而してそれは廣い意味に於ける人生の努力と云ふ事に歸するのであります。（終り）

318
701

昭和三年十月二日印刷
昭和三年十月五日發行

定價金拾錢
郵稅金貳錢

不許複製

著作者　本多靜六

發行者　東京市赤坂區溜池町一番地　帝國森林會內　宮田長次郎

印刷者　東京市麹町區紀尾井町三番地　甲田藤太郎

發行所　東京市赤坂區溜池町一番地
帝國森林會
電話青山六三三〇番
振替東京六八三七九番

終